

## 好意、対人距離および話題が言語と非言語的行動に及ぼす影響

和田 実

約20年前から非言語的行動に関する研究は急速に増えており、それらの研究をレビューした多くの論文や書物があるけれども、それらはチャンネルアプローチという観点をとっている。これは、1つの行動にのみ焦点を合わせて魅力や印象形成を考える接近法である。しかし、非言語的行動がそれぞれ別個に生じることはないので、1つの行動のみを取りあげて、その違いが魅力や印象形成に及ぼす影響を考えてもあまり意味がないと思われる。

その中であって、親密性を表わす行動に限定されているものの2者の相互作用中の非言語的行動全体を考えている(マルチチャンネルアプローチ) Argyle & Dean (1965)の親和葛藤理論は有用で多くの研究をうみだしてきた。彼らの理論によると、人対人の関係において親密性を一定に保つために、ある行動の親密性のレベルが変わると他のいろいろな親密性のレベルを変えることによって埋め合わせ(補償)と予測される。しかし、この点に関して相手の親密性のレベルに合わせる(返報: reciprocity)という知見や何の関係もないという結果を得ているものがある。

そこで、この矛盾する結果を統合して説明しようと試みるのが本研究の目的である。

矛盾する結果がみられる理由として次のことが考えられる。1つには、この理論を検討しようとした研究が人Aのある1つの行動を変化させ、それが人Bのある1つの行動にどのような影響を及ぼすかを調べるというチャンネルアプローチのままであった点である。第2に、親密性を表わす行動がふえれば必ずより多くの親密性が伝わると仮定している点である。実際には、状況や2者の関係によってポジティブな意味にもネガティブな意味にもなりうるが見出されているのである。

したがって、2者の相互作用中の行動全体を表わすのにポジティブな意味をもった親密性ではなく、全くニュートラルな意味の“直接性”を用いる。“直接性”とは簡単に言うと相手とのかかわりの程度を示すものである。例えば、視線なら多いほど“直接性”が高いのである。そして、その状況に応じてその“直接性”がポジティブな意味にもネガティブな意味にもなると考えるのである。

また、これまで2者の相互作用でかわされた言葉(言語行動)についてはほとんど考慮されていない。

そこで、言語行動を含めた2者の相互作用中の行動を考え、対人距離の違いが他の行動にどのような影響を及ぼすのか—補償か返報か—を2者の関係(好意の違い)を考慮することで明確にしようとするのが本研究の目的である。さらに、話題による影響も検討する。

なお、実験Ⅰは面接場面\*を設定し、実験Ⅱではともに純粋な被験者どうしの会話場面を設定して検討した。

## 実験Ⅰ

男性の面接者1人が60人の男子大学生の被験者すべてを面接した。好意の操作はお互いが持った第1印象を操作して行なった。対人距離の操作は被験者にとって遠すぎる、ちょうどよい、近すぎるのいずれかとした。話題の操作は親密な内容か否かであり、安藤(1980)に従った(親密さの低い話題、高い話題3つずつ、以下、順にL話題、H話題と略す)。従属変数は、非言語的行動の視線、微笑、体の向き(相手と胸が直面していない状態、以下BOと略す)、体の前への傾き(以下BL(F)と略す)、体の後への傾き(以下BL(B)と略す)の時間、回数、平均時間と発言までの時間(潜時)であり、言語行動としては発言時間と自己開示\*\*であった。

個々の指標の測度ごとに分散分析を行なったところ、視線の時間、回数と発言時間はH話題よりL話題の方が多く、視線の平均時間と微笑の時間、回数、平均時間と潜時はL話題よりH話題の方が多かった。対人距離による影響はBL(F)の時間と平均時間にのみみられた。すなわち、対人距離が遠いほど多くなったのである。また、相手に持つ好意が低い者(以下N群と略す)より高い者(以下P群と略す)の方が第3者評定による自己開示は高かった。

さらに、すべての指標の測度値に因子分析(主因子解—バリマックス回転)を行ない、7因子を抽出した。それらは視線の量、視線の回数、微笑、BO、BL(F)、BL(B)、自己開示であった。そして、これら7変数(因子得点を算出)で実験後の面接者に対して被験者が持つ

\* これまでの非言語的行動の研究のほとんどが用いている。

\*\* 第3者による評定と被験者自身による評定がある。

た印象を重回帰分析し、その回帰係数でそれぞれの指標を重みづけて全体の行動で表わされる“直接性”を算出し、分散分析を行なった。すると、P群は対人距離が遠くなる（対人距離によって示される“直接性”が低くなる）と他の行動で表わされる“直接性”も低くなるという返報関係が得られ、N群ではU字関係、すなわち対人距離が遠くなると他の行動による“直接性”は高くなり（補償関係）、また対人距離が近くなっても他の行動による“直接性”は高くなった（返報関係）のである。

## 実験 II

24人の男子大学生の被験者が2人ずつで2つの話題（L話題、H話題1つずつ\*）についてそれぞれ3分間話し合った。対人距離の操作は、2者間の距離を60cm（近距離）か260cm（遠距離）とし、他の操作はすべて実験Iと同じであった。従属変数は、実験Iのものに視線の交錯（両者の視線の重なり、以下ECと略す）の時間と頭の向き（相手に顔面を向けていない状態、以下HOと略す）の時間、回数、平均時間を加えた。なお、両者とも被験者の会話場面であったので潜時と第3者による自己開示評定はとれなかった。

個々の指標の測度ごとの分散分析によると視線の時間と微笑の回数とECはH話題よりL話題の方が多く、微笑の時間と平均時間はN群よりP群の方が多く、視線の回数とECは逆にN群の方が多かった。また、BOの時間、平均時間とBL（F）の回数とHOの時間は遠距離より近距離の方が多かった。さらに、BL（F）の時間、平均時間とECは近距離より遠距離の方が多かった。

次に、実験Iで抽出された因子に基づいて実験IIのデータを標準得点化してから単純和を作り、同様に印象をそれらの変数で重回帰分析し、標準回帰係数でそれぞれの変数を重みづけた“直接性”を算出して分散分析を行なった。すると、P群は対人距離が遠くなる（対人距離によって示される“直接性”が低くなる）と他の行動で表わされる“直接性”も低くなるという返報関係が得られたのに対し、N群では全く逆の対人距離が遠くなると他の行動による“直接性”は高くなるという補償関係が得られた。

## 討 論

個々の行動をみると、従来の研究結果から視線が対人距離に影響されることが予測されたけれども本研究では

影響されなかった。ただし、実験IIのL話題ではこれまでの研究結果に一致する、対人距離が近いより遠い方が視線が多いという結果が得られた。従来の結果と異なった主な理由は、実験Iでは被験者が面接場面というのを真剣にとらえず、「面接中は面接者の顔を見ていなければならない。」という社会的規範が働いたためであろう。実験IIのH話題で対人距離による影響がみられなかったのは、親密さが高い話題のために何を話したらいいかととまどることが多く、とまどっている時は相手を見ない（Kendon, 1967）ので遠距離でも視線が増えなかったものと思われる。また、微笑は実験IでL話題よりH話題の方が多くことから、親密性だけでなく不快を示す時にも使用されることが示唆された。他の非言語的行動と言語行動の結果は従来の結果とほぼ一致している。

次に、対人距離の違いが全体の行動にどのように表われているかを見る。予測は以下のものであった。P群は相手に好意を持っているので対人距離によって示される“直接性”が高くて（対人距離が近くても）快のままなので他の行動によって表わされる“直接性”は変化しない（高いままの返報）し、対人距離による“直接性”が低い（対人距離が遠い）と相手に好意を持っているのに話しにくいなどの不自然さから不快となり、それを埋め合わせるように他の行動による“直接性”を高める（補償）であろう。一方、N群では相手に非好意を持っているので対人距離が遠いと快であり、他の行動による“直接性”は変化しない（低いままの返報）し、対人距離が近いと不快ではあるが相手のことが気になり、対抗心や敵意等から他の行動による“直接性”を高いままに保つ（返報）であろう。

結果は実験I、IIともに快—不快の予測は仮説に一致したが“直接性”が返報されるか補償されるかという点では前述のように異なった。すなわち、実験IのN群は仮説に一致したけれども、実験IIのN群は全くの補償関係となり、P群は両実験とも全くの返報関係となった。N群の近距離で実験IとIIの結果が異なるのは、実験IIは普通の会話場面だったので相手とかかわらないようにすることが可能であったのに対し、実験Iでは面接者から質問がくるのでどうしてもかかわらざるを得ず、そのために対抗心が生じたからだと思われる。

このように、これまでのチャンネルアプローチと異なり、マルチチャンネルアプローチによって、しかもお互いの関係を考慮することにより、行動が補償されるのか返報されるのかが解決されるといえよう。

\* 実験Iの話題の中から、話しの材料が多そうなものを1つずつ選んだ。